

「母子相互作用の臨床応用に関する研究」の評価

評価委員 三宅 廉

この母子相互作用研究班は、その研究対象が広範囲にわたるため容易に結論を得ることが至難であるものの回を重ねるごとに充実し、そのねらいがようやく定まってきた感じがする。

ことにこのたびの報告を聞いているとその感が深い。申すまでもなくこの研究班の誕生したのは最近の我国の社会情勢があまりにも急激な変動を見せ、我国固有の母子関係がその影響をまろに受けて家庭環境まで一変してきたことに対し、こどもに生きている研究者に諮問を受けたのだと思う。

今回の報告を拝聴してその中に流れるエッセンスを拾ってみると、まづ母子相互作用の原点である妊婦の心理状態がまさに不安そのものであり、その影響を受けて胎児、新生児が特異な behaviour を示している。それには私が30年新生児と取り組んだ経験で知ったそれぞれの個性が大いに関係することを、このたびの報告でも確かめることが出来、それに適した対策が望ま

れるのである。また今年の発表の特色は母の育児不安に対する父親の協力がいかに大切であるかを教えたことで、今の家庭にこどもに対する理解と愛情の欠けていることを知るのである。

この研究班には他の学会に見られぬ何かが要求されていることを感ずる。それは哲学であった。大分古い話であるが東京で開かれた医学総会の細菌学会のときのことである。座長の緒方教授がおもむろに立上って「今迄の澤山の研究発表は結構だが内容に心がない、哲学がない」と発言され一同静まり返ったことを覚えている。この研究班にも人間味豊かな medical ethics の雰囲気が欲しい。

最後に私が常に叫んでいる育児の follow-up が親準備性の報告の中にその片鱗を伺うことが出来たのは嬉しい。これが私どもの研究する母子相互作用の目標であり、完成であることを銘記したい。